

多賀墨郷君にこたふる書

三浦梅園

混淪鬱淳⁽¹⁾の義御尋御座候。夫、人は天地を宅とし居るものに候へば、天地は学者の最先講すべき事に御座候。尤、天文地理、天行の推歩は、西学入候て、段々精密にいたり候へ共、それはそれ切にして、天地の條理にいたりては、今に徹底と存ずる人も不承候。かく広き世の中に、かく悠久の年月をかさね、かく数限なき人の思慮を費し、日夜に示して隠すことなき天地を、何ゆへに看得る人のなきとなれば、生れて智なき始より、只、見なれ聞馴れ、触なれ、何となしに癖つきて、是が己が泥みとなり、物を怪しみいぶかる心、萌さず候。泥みとは、所執の念にして、仏氏にはゆる習氣にて候。習氣とれ不申候而は、何分、心のはたらき出来らず候。阿難はさとられしかども、前生猴にて有しゆへ、猴の習氣やまざりしと申候、是よきたとへに候。とかく人は人の心を以て、物を思惟分別する故に、人を執することやみがたく、古今明哲の輩も、この習氣になやまされ、人を以て天地万物をぬりまはし、達観の眼は開きがたく候。

註

(1) 混淪鬱淳 『玄語』の「本宗」の部に出ている。「本宗」の語るところは実にこの問題である。それで多賀墨郷が質問したものに見える。字義としては本書の一〇頁参照。

(2) 習氣 華嚴經に「断除一切煩惱習氣」とあり、くせ、ならわしのこと。

(3) 阿難 釈迦の弟子。

其習氣とは、人はゆく事をば足にてなし、拵ゆる事をば手にてなすゆへ、運歩作用に手足の習氣これあり。さる程に、蛇の足なく、魚の手なき、どふやら不自由に思はれ候。天は足なくして日夜にめぐり、造化は手なくして華をさかせ、子を給はせ、魚をもつくり鳥をもつくり出し候。もし、己に執する処有候へば、其運転造化、甚あやしむべき事に候。あやしむべき事にして、あやしむ人もなく候は、是も朝暮に見なれ、空々として貪着なしに打過るにて候。物の上よりして見る時は、天地も一物にして、水火も各一物、草木鳥獸も各一物、我となり人となるも、各一物にて候。それを人には人癖つき候て、我にあるものを推して他を觀候なづみ、やみがたく候。夫故、人の癖には、何にても人になして、見もし思ひもし候。子ども遊びの絵本に、鼠の婿入、ばけ物づくしなどいふあるをみるに、其鼠を鼠のまゝに致しをき候へば、最本来の面目に候を、其鼠を悉人になし、智殿は社杯大小、婿子は打かけ綿帽子、のり物つらせ、徒士若党、すべて人の様に成し候。又ばけ物の本を見るに、傘の茶臼にばけ、箒の手柄に変じたる図はなし。只あるとあらゆる物、目鼻手足出来り、とかく人の様なる物に化ざるはなし。涅槃像の図をみるに、其龍王といふ物は、衣冠正しき人体にて、その本体の龍形は、火事頭巾かづける様に画がきなしぬ。かゝる心を以て天地を思惟する程に、天には上帝、地には堅牢、風の神、鳴る神など、形はさもいやらしく描きぬれども、足を以て身を運び、手を以て技を出す。さる故に、風は囊に蓄はえ、雷は大鼓に声をく。もし誠に囊あらば、何を以て製するや、もし誠に大鼓あらば、何の皮にてはる事にや、いとあやし。もしかゝらましかば、天も足なくてはゆかれまじ、造化も手なくては細工出来るまじ。猶ちかきに引つけていはゞ、すべて動物は牝牡有りて、草木には牝牡なし。牝牡なくて生々せ

ざるは、動物の習にして、牝牡なくとも生々に事缺ざるは、草木の習なり。己が習ひをもちて、己にあらざる物に推さば、いかで其理に通ずべき。又譬をとりていはんに、火に意ありて水を思はんに、水いかゞして物を焼らん、水いかゞして物を燥かす覽と、己がかたにある物のみ推して、かれになき所にもとめ、水も亦意ありて水にある物を火に求めば、其智力を盡し、其生涯を窮めたりとも、知るに益はなかるべし。約を②いる、事、牖よりすといふ事も候へば、最さとしやすき物がたり、又ひとつ申すべし。

註

(1) 貪着 頓着の意。

(2) 約をいる、事云云 『易』の「坎卦」に「納約自牖」とあり、進んで人に説くには、先ず其の人の理解しやすい所から説くべきことをいう。

むかし、何れの帝みかどにてかおはしましけん、堺さかいによき藤あるよしきこし召めきれ、勅とくして九重ここのえの内に移し裁しめ給たまひしに、帝みかどある夜の御夢みゆめに、いときよらなる女の、打しほれける気色けしきして、

思ひきや堺の浦の藤浪の都のまつにかゝるべしとは

と打うつんと御覧みらんじて、夢さめ給たまひ、花も故郷や思ふとて、二度堺さかいに返し給たまひしとぞ。是等の物がたりは、世に多き事なり。草木意なし、夢入るべき物にあらず。別なれれては馴なれし故郷をしたひ、過あてはこしかたをおもふは人の心にして、我心の動く処、めで給たまふ花に感じ、常になれても遊び給たまふ歌をなしける物にして、藤のあづかる処にあらず。あづかる所なき花にも、我情態をこれに移せば、花も又人なり。古来、明哲の輩も、品は異なる事はあれ共、此病に坐せられ、人の境に居て人を離る、事能あたはず、目の翳障をなすなり。さる故

に、なれ癖に貧着なく、是がなづみとなりて、物をあやしみいぶかる心なき故に、一生を醒るがごとく酔ふがごとくにして終るなり。さらば、物を怪しといふかる心なくば、なきにしてやむかとおもへば、さにもあらず。神鳴り地震りたりといへば、人ごとに頸を撚り、いかなる事にやといひのゝする。我よりして是を觀れば、其雷地震をあやしむこそあやしけれ。故いかなとなれば、其人地動くを怪しみて、地の動かざる故を求めず、雷鳴る所を疑ひて、鳴らざる所をたづねず、是空々の見ならずや。此故に、皆人のしれたる事とおもふは、生れて智の萌さぐる始より、見なれ聞なれ、触なれたる癖つきて、其知れたると思ふは、慣れ癖のつきたる事なり。我人に石を手にもちて、手を放せば、地に落るはいかなる故ぞととへば、それは重きによりて下に落る也、知れたる事也といふ。是も其人知りて知れたる事といふにはあらず。なれくせにて貪着なしにしれたりとおもふなり。然れば是を醒たるがごとく酔たるが如しといはんも、我過言にはあらざるべし。此故に其うたがひあやしむべきは、変にあらずして常の事也。孔子の、生を知らずいづくんぞ死をしらんとおしへ給ふもこの事なり。人々死後はいかゞなるらんいかゞある覽と怪しめども、見在かくしてをる事も、悉皆しれざる事なり。俗語にも、前の瀬わたりて後の瀬とこそいへ。しかるに世の人前の瀬を置て、後の瀬の事のみおもふ。我怪しむ所なり。しかれば石、物いふといふとも、夫より己が物いふを怪しむべし。枯木に花咲たりといふとも、先生木に花さく故をたづぬべし。

註

- (1) 生を知らず云云 『論語』の「先進第十一」に、子路が死について問うたことに対しての孔子のこたえ。
 (2) 見在 現在に同じ。

かく物に不審の念をさしはさまば、月日のゆきかへり、造化の推遷るは更にして、己が有と占め置ける目のみえ耳のきこゆるも、態をなす手足も、物をおもふ心もひとつとして合点ゆきたる事はあるまじく候。それを世の人いかゞすますとなれば、筈といふものをこしらえて、これにかけてしまふ也。其筈とは、目は見ゆる筈、耳は聞ゆる筈、重き物は沈む筈、かるき物は浮ぶ筈、是はしれたる事也とすますなり。然れば其次手に、雷は鳴る筈にて鳴り、地震は動く筈にて動き、枯木に華さかんもさけばさく筈、石の物いはんもいへばいふ筈、とすまし度物なり。又少し書讀などいふ人は、雷は陰陽の闘などいひて、人をさとすなり。其人に陰陽といふものをとへばしらず。爰におゐて、我その智と愚とを辨ずる事能はず。この故に、智を天地に達せんとならば、雷をあやしみ、地震をいふかる心を手がかりとして、此天地をくるめて一大疑団となしたき物に候。猛獸まさに搏んとすれば、必形を伏す。鷲鳥まさに撃んとすれば、必翼を斂むとも申候而、とき事をせんとては、ふかくとゞまる事をなす事に候。弓をひくにも、矢の弓手に遠くゆくは、馬手にふかく引ゆへなり。疑ひ多き人さとの事とし。疑なき人のさとの事鈍きは、弓に満を持せずして、矢を放てるがごとし。此故に世の人の天地をしらざるは、慣れ癖に貪着なく、習氣を秘蔵する故にて候。是に因て天地を達観せんと思召して、平生慣れて常とする事を疑の初門とし、触るゝ事悉御不審を起され、我かくおもひかくうたがふもの、もと人なれば人の執氣ある処を、御かへり見有べく候。

世に所謂天地に通ずるとは、天象地理を記し、日月星辰の運行を推歩する人の事に候。なる程其学を専門につとむる人は、思ふの念、其学精密にも至るべく候へども、前段に申せしごとく、それはそれ切にて、日は何故一歳に天を一周し、天は何ゆへ一日に地を一周し、緯行は何故一度は南し一たびは北すると、うら返し候へば、是も只然あるによりて然かそゆるのみに候へば、達観とは申問敷候。扱書籍と申候物も、むかしの人の

面々の見たる所を書つけたる物にて、造物者の書たる物にてなく候へば、其人の通じたるかたは明あきらにも候へ共、塞ふさいがるかたの候て、たとへば人の物いふには通じ候へども、臭をかぐ事は塞ふさいがりて、犬猫に劣り候様の物に御座候。されどもむかしより書にても著あはし候程の人は、みな常の人には等を躡こへたる人に候へば、最初書によるもよく候へども、天地を得と臍の下に入れて書たる書もなく候へば、執する所ありて、徴を正にとらざれば、是又大習じっけ気の種子に候。書を大習じっけ気の種子と申を激論のおぼ様にも思しめすべく候へども、目のあたりある事にて申候もはんしに、人生れて嬰孩①の時、猶天然の真を失せず、其子を一人は浄門の僧②となし、一人は日蓮下の僧となし、各其師に従つて学ぶ事十年、帰り会して各所見を呈せんに、十年の習じっけ気氷炭相反し、死すといへども其守をかへず。嬰孩天然の真をもとむとも、いかでか再度かへる事を得ん。此故に書に因て自得、是即徹底造物起り来て自談ずとも此外あるべからずとおもふとも、是即習じっけ気人に憑よつてしからしむるかはしるべからず候。此故に門を尋ねて其主人にあひ、其主人に請ふて己が耳目を具する者をば、我是を風化の人とて、従前の事跡を考え、荒外の地理など察し候様の事には、古今の変化沿革、東西の遠近離属、その外百爾の方法、我見聞の及ばざる所をのせ、世々の人の発明ともあわせ照さんには、書まことに主に候へども、天地はむかし新しき天地にもあらず、今ふるき天地にもあらず。いつもかはらぬ無鹽にして、我爐中の火即万里の外かたわらの火にして、我盃中の水即千古の前の水なれば、此天地をしり此水火をしらんとならば、先此無鹽に試みて、傍かたわら書籍に参考し、あはざる処を置き、あふ処をとるべし。

註

(一) 嬰孩 みどりこのこと。

(2) 淨門 淨土宗。

此故に、天地達觀の位には、聖人と称し仏陀と号するも、もとより人なれば、畢竟我講求討論の友にして、師とするものは天地なり。天地を師とする時は、古の聖賢より諸子百家今日藹藹狂夫の言葉にいたる迄、等の隔てはあるべけれども、ともに文を以て友を会する位にして、取舍は各あるべき事に候。天地は広き量にて候程に、いれざるものなく候。容れざる者なく候程に、達觀の位に学流の門戸なく候。前かた、或人來りて、我已に此天地を吞却すといひし程に、天地大なり天地を吞却する人幾百千万億をか容る覽と謂て咲ひし事あり。いかに広大精微を説き出し候ても、天地にある広大精微に候。いかに超越不群の人に候ても、此天地の内立ち、此天地の内をゆく人に候。其達觀する処の道は、則條理にて、條理の訣は反觀合一、捨心之所執、依徵於正のみに候。捨心之所執とは、習氣を離るゝ事にして、依徵於正とは、徵と見えながら徵にあらざる徵あり。たとへば、日月は慥に西にゆくの徵あれども、其実は東に行く。水は正しく火の讎と見ゆれども、火は水によつてなるごとし。天地の道は陰陽にして、陰陽の体は対して相反す。反するに因て一に合す。天地のなる処なり。反して一なるものあるによりて、我これを反して觀合せて觀て、其本然を求むるにて候。此故に、條理は則一有二、二開一、二なるが故に、粲立して條理を示し、一なるが故に混成して、罅縫を越没す。反觀合一は、則これを繹ぬるの術にして、反觀合一する事能はざれば陰陽の面目をみる事能はず。未陰陽の面目を見る事能はずんば、博識多覽、聰明穎悟の人といふとも、天地の室をうかがひ見ることは、得あるまじく候。此故に、條理を天門の鎖鑰とも申候。條はもと木の糸だにして、理は其すぢ也。是を木に就ていふに、其一本の身、木根を有し標を有し、根には次第に根をわかち、標には次第に標をわかち。其分るゝ内、子細にみればすぢ有り。其すぢといふもの、何の為のすぢなれば、氣、其すぢに従つて運び、形、其氣の運びによつ

て成るにて候。是をひとつ水に移していはんに、田に水を灌そそがんとしては、必かならず溝を拵こしらゆる也。其溝即水の理也。理のわかるゝ処、條わかれ、千條万枝になり候ても、其理たち候へば、数限なき田地にても、水其理に従そそひ灌ぐにより、ある程の田の稲の数々、葉の末、穎ほやきの先までも従そそひ達し申候。此故に、天氣東西に転じ、日月順逆の行をなすも、川流れ潮うしほ浜まるも、鳶とび飛び魚躍るも、氣理に従つて、運ぶ事に候。

試おのに何なりとも草木の葉をとりて御覽候べし。大理小理をさき、眼精の及ばざる迄も理はしき候て、氣運び己おのが形をなし候。此故に理といふ物は、天にも地にも、山にも水にも、乃至鳥獸・魚鱉・虫豸・菌寓の類にも形は氣の運ぶに成り候へば、氣運ぶべき理なきはなく候。此故に條理の理は、古人の説ける理もその内の事には候へども、死活の隔ある事に候。人身の脈といへるも、即此理にして他物にはあらず、理を以て形はなるものなれば美醜長短も皆此理のなす処なり。されども慣れて、繹たずぬる貪着なければ、人の体のひくつきなりと濟し、其上は秦越人王叔和(一)の言を造物者の直訣けつのごとく、是を金科玉條となして、偶たまたま疑をきざしても、小智は菩提のさまたげと了見し、一生明堂の蒙茸に取つき候も、本意なき事に候。人の経脈、みな一身に氣血を運ぶ道路にして、唯其間氣質じつけの分あり。古人経脈の名目をば設けながら、其説は分明なる事も不うけたまわらず承、是又慣るゝに安んじ、書籍の習氣じつけを執もとめるし、微もとめるに正による事能あたはず、其造言の始の人を神聖とたて、これを造物者の位に置候。是即天地を師とせず、人を師とするの弊にて御座候。天地を師と致いたし候は、反觀の工夫にて、反觀の工夫熟し候へば、天地になき事はしらず、幽と隔て玄とふかく候とも、天地にある程の事は、推しいたるべき事に候。條理は則すなわち物中に具する性体にして、性もと一体をひらくに至つては、一陽一陰相反す。故に一は二を有し、二は一を開く。故に一即二にして、二は則すなわち万物の位、一は則すなわち統すなわちべざる所なきの位なり。初心の間は、只仰ひで蒼々として碧瑠璃のごとくなる物を見て天とおもひ、俯して磅礪ほうはくとして土石の填てるを見て地を談じ候。是もさる事には候へども、是は至つて麤底そていの天地にて、此位より天地を窺うかがひ候へば、所謂天

文地理運行の推歩にとゞまり候て、ある物を数え候に過ず候。

註

(1) 王叔和 晋時代、高平の人。太医令となる。医のみでなく経史にも通じていた。張仲景の遺文を編して『傷寒論』(二十六卷)を編次したほか、多くの医書をあらわした。

天地とは、もと氣物の成名にして、氣天を成し物地を成す物に候へば、一物あれば一天地、万物あれば万天地也。古人の所謂物々各具一太極にて、恒河沙の世界と申候へば、事々数多かる様にきこへ候へども、恒河沙の内、已に恒河沙の世界をそなえ候へば、天地は幾恒河沙をかさねても、つくす事にあらず。是即二の位にて候。是を二の位と申候は、天地かくの如く紛々擾々として、物多き様に見え候へども、只かたちある物ひとつ、かたちなき物ひとつ、此外に何も物なく候。其かたち有物を物と申し、かたちなき物を氣と申候。かたちなき物は目にさえぎらず、手にさはらず候程に、むかしの人も、心得違ひて、虚空なり無なりとおもひ候。勿論地の実に反して其体虚し、地の質あるに反して質なく候へば、天を質なき虚体の物と心得候へばよく候へども、さなく候て、あながちに虚無虚空と心得候ては、大なる間違に御座候。もし其さす処の空無、真の空無に候はゞ、日月星辰もかゝる所なく、我も物も居る処なかるべし。日月星辰も已に其内にかゝられ、物も我も已に其内に遊ばるれば、此虚体あるに相違はなし。ある物をさして無といふ、是顛倒の念ならずや。此故に地は実にして体をなす。実の体あつて山原湖海これに列なり、虚の体あつて日月雲雨これに居る。こゝにおゐて、精細によく思量すれば、氣は実体の地中にも、虚体の天中にも、一杯に充塞して、纖毫の罅隙なし。是を

人の身の上にて申さんに、此身は則実体の地にして、温動を以て立つの気は則天なり。温動にかたちなければとて、是をなき物といふべからず。其温動の精英即人の神にして、名を分ち命ずれば、これを心と名つくる也。此故に此有体の身は、則神の人物にして、無体の神は畢竟物の命なり。此故に気聚まれば物結ぶ。物むすべば神立つ。人は小物なり、天地は大物なり。小物も神と物とを以て成り、大物も神と物とを以て成る。一と衆立の手前よりしていふ時は、天地の物は天地の物にして、万物の物は万物の物なり。天地の神は天地の神にして万物の神は万物の神なり。こゝに一と剖析の理を考ふるに、かく森羅万象競ひ立つ様なれども、資る所に變態ありて給する処に二つなし。故に其森羅万象同一神物を混成す。是反して合一する処を觀る也。何ゆへに反して合一する処を觀るとなれば、物一と成るかたち本来必相反す。本来よく反する故に合すれば一つと成る。是を人工の上にていへば柄と鑿となり。柄の中高にさし出たるに反して、鑿は中窪に落入るなり。其凹凸に少しにても無理あれば、或はきしみ或はくつき、ひしと合す。反せざれば一を成さざるゆゑなり。此故に造物のたくみ反する時は條理衆立すれども、合ふ時は混成して其縫目を見ず。

此故は神はかたちなふして活し、物はかたち有つて立つ。かたちよく其神を容れて活し、神よく其かたちに居て立つ。しからば神その状いかゞぞといへば、唯活澆々地、俗にいはいゆるひちくとなり。條理の道次第に天地を剖析し、剖析にしたがひて其反態も變化を盡し、然して物の分るゝ処、各一神物を成立すれば其なりの出来様と、其ひちつきの様とは千態万貌異なれども、火は火の体をなして火のひちつきをなし、水は水の体をなして水のひちつきをなし、魚鳥、魚鳥の体にして魚鳥にひちつき、天地天地の体にして天地にひちつく。其ひちくをさして鬱淳といふ事にして、混淪は則物立ちて見はるゝ貌なり。古人はもと地の貌を磅礴といふに對して、天の貌を混淪といひしなれども、今こゝに混淪といふは天地をくるめて物となし、神の鬱淳に對

して形容せる言葉なり。さる程に、各々成就の上にていへば、蝦えびの小むつかしきかたちも、蛞蝓なめくじの太平なるなりも、皆己みづかが混淪なり。混淪の上にていへば、地は塊おおうたる内に一点の中をなして居る者也。其一点小き事形容すべき物なし。其一点よく地を載せ、天をのせて撓たがまず。中の一点小き事形容すべからずとは、一点中に内なければなり。もし僅にも内あれば、至つて小き物にあらず。中の一点内なきが故に、其外の大なる事外をなさず。外をなさざるもの即無窮也。こゝにおゐて、物其中の一点に巍乎として立ち無際涯にいたるもの、是大物の混淪なり。此故に、ここはてもなき物をたて、ひちくとする神を其内に活す。是を神鬱うづぼつ淳として活し、物混淪として立つといひ、小物皆己がかたちを此混淪にとり、己が神を此鬱うづぼつ淳に資りて天地の間にならびたち、各々の作用をなすことなり。

さて右に蒼々として碧瑠璃のごとく、磅ほうはく磚として土石の填てるは、麓そでい底の天地と申候□、氣に精せい麓そ有て、物を没露致候。先この精せい麓そ没露の態を辨じて、かく蒼々たるものを戴き、かく磅ほうはく磚たるものを踏むことも見え可もうすべく申、其精せい麓そとは、麓そなる処の氣、其体を没すといへども、猶なお其場所をもてり。精せいしき所の氣は物の内に居て、其場所をもたず。場所をもつもたずといふことは、先水入れにていはんに、水入れを拵こしらゆる始、先孔を二つあくる也。其二つの孔の作用いかにとおもみみるに、此水入れの量水壺升をいゝとみて、いまだ水を入れざる内に、水壺升をいゝ程の場、此器の内にあり。水なき内にも、只空物にはあらず。すなわち此没体の氣を一盃充て居れり。さる故に、此器に水をいゝ時には、一方の孔より氣出づ。水出る時には又一方の孔より氣入る。是其場のしばらくも虚無にして居ることのならざればなり。此故に地のあらざる所は天其場所をなす。此場所ある故に日月も此内にかゝり、山川も此内に列なり、風も此内に吹、雨も此内に降り、われと物とも皆此内に遊ぶなり。こゝにおゐて、かたちあるものを露体といひ、かたちなきものを没体といふ。其体

を没すといへども、猶其場を有する者は、鹿中に天をなして、精中よりこれをみれば、其天猶地のごとくなり。然して鬱淳の神にいたりては、其場を占めず。其場を占めざる故に、水成れば水鬱淳として活し、火成れば火鬱淳として活す。天地の大なるよりして、散小の万物にいたつて、其物々に鬱淳たり。これ中庸にいはいはゆる物に体して遺さずといふ位也。此故に鬱淳として活し、此混淪を立るものは、物に体して其体なし。没して天をなし、露して地をなす物は、畢竟地中の天地にして、蒼々の天、歴々の曜、塊々たる無際涯に帰し、一大結物の地にして、鬱淳たる神の成れる天に有せらる。故に天大地小と見る眼は、天地を達観する眼にあらず。

もしよく天地に達し條理に吐含ある事をしらば、地なんぞ天より小ならん、天又何ぞ地より大ならん。此故に神物混成の処をみれば、物よく宅をなして其鬱淳の神をいれ、神よく活をなして、其混淪の物をたつ。只鹿底にしてよく没して虚の体をなし、露して実の体をなし、一大結物中に天地を開くも、精鹿並び分れて没露並び立つ。其没する物を天機とし、其露するものを性体とす。此性体といふは、露して物を成すの性体にして、性一体二といつて、陰陽をたつる所の性体とは、名同じふして差別あり。天機は没して天地をなし、性体は露して天地を成す。天は天地を宇宙になし、機は天地を転持になす。成し得て未天地を物に露はさず。体は虚実を以て天地をなし、性は水火を以て天地をなす。成し得て已天地を物に露はす。体をあらはさざる物宅をなして、露はるゝもの其内に居る。此天機性体の四つの脚のごとく、一脚なく候ても、餘の三脚自立つ事を得ず候。此宇宙の字を古来、古往今来を宙といひ、天地四方を宇といふと解したり。

是にて大概すみ候得ども、言の病有之候程に、唯衰々として通ずるを宙、塊々として塞がるを宇と御覽可被成候。されば今布を織り候にも、経と緯と合せざればならず。家を立るにも、箱をさすにも、縦横の道具なくしてはならず。是経緯也。何故に経緯なくては物ならざるなれば、此世界もと経緯にて織たるもの故、其間

に成るもの、其道によらざればならず候。さる程に前つかた、竹を網代あじろに組たる団扇うちわに一辞を請はれたる事有し時、我

一直一円一経一緯、人造有資織諸元氣⁽¹⁾

と書て遣し候。さる程に、物ごとに経緯なきはなし。ちかく己が身にとりていへば、此身緯となり此命経となるなり。其古き解に、言の病ありといふは大物にもと六つと定れる数もなく、古往き今来るといふ言も、是より已往をいひ遺せり。先是を小物にこゝろみて、漸ようやくに推して、経緯の大なる物を知り、大なる経緯をしりて、天地万物経緯に織らるゝ事をしるべし。其宇宙の面目を觀るには、先この露体の天地水火を除きて、其経緯をしるべし。

註

(1) 一直一円云云 この十六文字の書は、軸となつて現存している。

今日を閉て思惟を下さんに、しばらくかりに此天地を掃却したりとも、衰こんてんとして通じて押移るの時と、塊おうおうとして塞りて物を置く処は、除き盡さざるべし。衰こんてんとは、水のひた流に流るゝ様に、いつより始るとも、いつに終るとも、其端を見ざる貌にして、塊おうおうとは、日月星辰もなく、ふむべき地、戴くべき天を分たざれば、指すべき東西南北たゞず、立べき上下もわかたざれども、唯いづくを限りともしらざる貌なり。押移るを通ずるといひ、あらぬ処なきを塞ふさがるといふ。塞ふさがるとは充塞の塞にして、窒塞の塞にあらず。窒塞とはかけ樋など水の通ふべきが、ちり木の葉様の物、通ひを閉て、水通はざる様の事にして、充塞はいづくまでも行わたりて、ひまなき事なり。其衰こんてんとして通ずる物、時にして経となり、ゆく物みな是を通るによりて、万物の路と

なる。其^{おうち}塊^{くわい}として塞^{ふさ}がるもの、処^{ところ}にして緯^緯と成り、居る者皆是に居るに因りて、万物の宅となる。此故に、日月此^{こんこん}衰^{たい}として経に通ずる時に刻みをつけて、夜となり昼となり、月となり歳となる。天地此^{おうち}塊^{くわい}として塞^{ふさ}がる処に位を定めて、東となり西となり、上となり下となる。是経緯の本にして小物の経緯知らず。織らざれども自然と此則に従ふなり。

天地もと活物機を含んで動止す。気は外に居て其方よく動き、物は内に居て其方よく止まる。うごく物は円にして、止まる物は直なり。円なる内に相反して動く故に、一は東にめぐり、一は西にめぐり、直なる内に相反して動く故に、一は上り行き、一は下りゆく。爰^{こゝ}におゐて、塊^{おうち}の内、内直にして持し、外円にして転ず。転、天を成し、持、地をなして、宇宙転持の没、天地を成す。是皆氣にして、物ならざるによりて、天地有といへども、未目にさえぎらず、手に触れず、没は露の偶にして、没あれば露あり。天地はもと始もなく終りもなく、行末の果もなき物なり。是も人に始終ある習^{じっけ}氣を離れざる故、とかく始絡を立てざれば心すまず。さる程に仏氏は、此世界に成住壞空など、いふ事をたて、空より次第に天地を成し、終^{つひ}には壞し空劫に歸し、又成し又空するとも説き、邵康節^①などは混沌開闢の説を増益して、天は子に闢け、地は丑、人は寅に開け、西の会にして天を閉ぢ、戌の会にして地を閉ぢ、亥にして人をとづるなど、思ひくの自論にて杜撰をなせども、皆條理をしらざるよりして、天人を混ざるの妄説なり。さる程に、天機、性体に先だつにもあらず。性体、天機に後るゝにもあらず。たとへば一匹の錦、裏と表と一時になり、一卵の殼^{こゝ}、左翼右翼一時になるがごとし。此故に、没中の天地を先説くとして、没先なるとするにもあらず。露中の天地を後説くとして、露後なるにあらず。此故に、已^{すで}に一物あれば、其物に没する氣を有し、露する体を有するなり。其有する体二つにわかるれば虚実なり。虚の体よく天を成し、実の体よく地を成し然^{しか}ふして其陰性、無際涯より内に収めて地を結び、陽氣に噴

れて水をなす。陽性中の一点より発して天に散じ、陰気に聚められて火を成す。こゝにおゐて、日月星辰上にかゝり、山原湖海下に羅なる。兒女の輩、地といふ物は、金輪際といふよりはえぬき、天といふものは、浮瓊の様なる物にて、天井のごとくはりまはして、其間は唯何もなく、空たるから物にて、東西南北の海は、さきよりさきにひたつゞきにつゞきて占めつかず、月日は地の下をくゞり来る様に心得、天地の真形一円球にして、地その核子なるをしらず。夫天地の真形は、地球の円、其さし出たる処国となり、落入たる処海となり、上下四方人取りまわし、海もろ共に円にして、天塊たりといへども、又円にして天象をいるゝなり。

註

(1) 邵康節 邵雍、字は堯天、宋の河南の人、康節はその諡。北海の李之才について物理性命の学を修めた。著書に『皇極經世書』・『觀物篇』・『伊川擊壤集』等がある。彼の学は百源学派といわれる。

されども、人、天を戴き、地をふむの習になづみ、水は傾けばこぼるゝなどいふ左徴にみつき智恵働かず。此故に物には必始あり終あり、地は平にして天は長く、月日は西にむかひ水は傾けばこぼれ、火に煎ずれば水は盡き、水を灌げば火は滅し候などいふ様のなづみつき、それをよき証拠と確く覚え込候故、何分にも智の働き出ず、其事語りても只石に水を投ずるがごとくに候。さる程に、天地をしらんとならば、先此鹿底の天地の形体、日月の運行を尋ね知るべきなり。運行は推歩家あり、形体は天文地理の書あり。西洋の学入りしより、これを実徴実測に試みて、次第に精密になれり。猶ゆくゆく開くべく覚ゆ。世に其人ある事なれば、就て学ぶに不自由なる事なし。然してそろく自分の眼を生じ、古人の謬説に惑はざるべし。先、初入いづれにも天地をまろくなすべし。天地とくとまろく成ぬれば、水を倒にしてこぼるゝ処なく、東を西にさしてもまどふ

処なし。さて、昼夜かはるく、長短し、春秋一時に有之これあるがごとき、反觀合一の工夫も、実に試むる処いできた来り、然しかして後、はじめて我習氣じっけに泥なすまされしといふことをもさととり、稍やや智ちの働出来いできたり、達觀の楷梯となりぬべし。此故を以て、天地達觀の初門は、天地の形体、日月の運行をしるにしくはなし。古今の書籍は、牛に汗し棟に充ても、猶なおあまり有る事に候へども、みな習氣の内より書たる物ゆへ、其なづみをさるの良薬と存ずるは見あたらず候。しか申候へば、只手まへ申候事のみ、よき様に候へども、さにてても無御座候。

天地に條理あり、分れて祭立さんりつし、合して罅縫かほうを没する処は、天地本来の面目、古人ときいたらざる所と自は断じ候へ共、むかしの人も、皆是天地密合と存ぜず候て、説をなしたる人もなく、我も亦天地にあらざれば、我習氣じっけの僻ひ必多かるべし。故に三語(1)数十万言、天地に合する処あらば天地に歸し、天地に合ざる処、晋にて可有これあるべく之候。しかれば、必、我説御信用に及ばず、これを天地に質ただして戻る所、唯其正を冀こいねがふ事に候。さる程に、世の師の門に遊ぶ人、その師説に違ふ事を心ぐるしく思ひ、師家の人も少しはいむ気味あり氣にみえ候。是人を以て師とする故に候。晋は天地を師と心得候へばたとひ少年輩、我より句説を授け候ても、同門の朋友に候へば、何かいむ事の候べき、如此心得候へと、常には申候事に御座候。此故に、学問に書上の学問と事上の学問と御座候。書上の学問とは、たとへば論語に季文子の三度おもふて行ふを、孔子の再度すとも是可なりとの給たまひし、いや再度せば是可也なりと、其当否を論じ候様の事なり。是を事上にうつしていへば、多念にわたり、猶なお豫なほ狐疑致す様になり、果決なきは用立なず。早く決断覚しき場あり。幾度も千慮万思の上に決すべきあり。再たびせば可也といふ時、再たびせばの工夫を下し、再たびすとも可なりといふ時、大概是違はなしと見定めたりとも、猶なお熟念して、後悔を遺すべからざるの工夫を下すべくして、注家の是非にあづからざる処あり候。この故に書生の学問は其師の立説を主張する癖ありて、それに我意をくわへ、敵味方とわかる

なり。しからば、文義はいづれに見ても苦しからずと聞給はゞ、是又我言を執し給ふといふ物に候。さる故に、親もてる人は、徂徠学にても朱子学にてもよく候、親に孝なる様に学びたく候。鎗つかはん人は、素鎗にても十文字にてもよく候、人をつく程になり度候。それを猶、これよく彼よしと論じ候は、あたらぬと申にてはなく候へども、畢竟手前かたやの論にて、上戸下戸の昔より、饅頭と酒の美不美を争ひて、今に定まらざるがごとし。天地の是非善悪といふものは、学者もわかれ素人もわかれ、君もにくみ民もにくみ、仏者もほめ儒者もほめ候物に候。それ者同志の是非得失を、みな己がおもふまゝにせんとおもふは、世の中の人の顔を一様に見せんとおもふ様なる者にて候。造物の手にさへ合ざる事を、己がおもふ様にせんとおもふは、大なる不了見に候。さいへば、又しからばみな悪みいとふ悪も、つくり直されまじき程にといはゞ、又さきの言になづめる也。

註

(1) 三語 『玄語』・『贅語』・『敢語』を指す。

(2) 季文子の云云 『論語』の「公治長第五」にある。季文子が慮多く疑多く、自ら決することが出来ないのを孔子が矯めようとした。

とかく天地は活物故に、活手段なく候ては、よき事も用をなし難く候。天地隠さず人に示し候へば、書を読むにも、人にきくにも及ばざる訳には候へども、又書にもより人にも問はず候へば、智もひらけ不申候程に、愚蒙の言も達観の階梯とも思し召候ば、天地に御合せあるべく候。諸家の人のいふをきくに、我道はかく立るなり、彼はかく立るなりなどいふ也。天地は我立る者にはあらず、其立ちたる者に我したがふ事に候へば、天

地を全観する事も、人事を精しく察する事も、唯有る通りそのまゝにみるより外の細工なく候。さる程に、^{がつてん}合点致候而も、^{がつてん}火は合点せざる前の通にもえ、^{がつてん}水は合点せざる前の通にながるゝ事に候。故に名は人のつけ候物に候へば、^い難波のあし、伊勢の浜荻ともかはるべく候へ共、実は我を以てみだるべからず候。さる程に、天機性を以て、此天地を全観する事を得ば、経通緯塞の内、虚動実地の天地を容れ、日月上に転じ水土下に持し、我と万物と、其路をゆき其宅に居るの真面目を得ん。さる程に、我目、物に目くるめく間は、万物紛々擾々たるがごとくなれども、^{すて}已に天地手に入りてみれば、天地位を定め、火上に照し、水下に湛ふる迄にして、是が活物なるにより、^{いんうん}網縷摩盪して有意温動の動物と、無意冷止の植物と、只此二種を醸し出して、其物と神とを千態万貌に変化するなれば、至擾還て至簡の至りに候。

註

(一) 難波のあし 物の名も所によりて変りけり難波のあしは伊勢の浜荻。

右の趣に候へば、天地をしるは我私の意を入れず、あるまゝに天地に従ひて、天地を師とするにしくはなく候。されども、天地物いはず、人々のおもふ様に見らるゝ物にして、正す処の人、千差万別に候へば、口舌を以て争はんには、盡期なく、自得にしくはなく候。されども、其自得も心々にて、天地はあぢなる物に候。さる程に、組て落る処は、臭味同じきもの打より語らふ事に候。さるによつて、我説人に強不^{しむ}申。此頃も人來りて、我説を破する人ある事共物がたりしける間、それにてよしと申てかへし候。是も一無窮、非も亦一無窮、無窮の間に遊ぶことに候。しからば、賢にも、もし古今に歴試し天地に考え、合ふ処ありとせば、拙き言も魚兔の筌蹄^{せんてい}となるべく候。よつて、かさねて申入候。人は人の境に住み候へば、人よりして智をひらくも抛なき

事に候。されど智をひらくに、推すと反すると心得べき事に候。人よりして人を察するには、柯かを執て柯かをきるの理にて、我悦ばしき事、人の悦ぶ事にして、我かなしき事、人の哀しむ事なり。己にあらざる物を察するには、火の好み水に推すべからず。魚の好み鳥に推すべからず。故に反觀にあらざれば、我にあらざるものに通ずる事能あたはず。推觀にあらざれば、人に恕する事能あたはず。恕の義は俗に身をつみて人のいたさをしるにして、古人の解も数多みえ候へば略し候。

註

(1) 「原著に記述なし。1型に曲がつた斧のえ。」

反觀前にも申候もうしへども、又一物を挙げ、くり返し動植の上に就て申さん。動は鳥獸の總名にして、植は草木の總名なり。然しかして動は意あり、身温にしてよく動く。植は意なし、身冷にしてとゞまる。動は内虚するを以て、養あひを上口より内にとり、植は内実するを以て、養あひを下体より表にとり、動、本を上にし末を下にし、植、本を下にし末を上にし、動、牝牡よりして子を下き竅きやうに生じ、植、華実よりして子を上頭に結び、動、地を離れて横行し、植、地に就て豎立し、動の枝は数定りて下りむかひ、植の枝は数定まらずして上りむかひ、動、生ては暖に、死しては冷ゆ。植、生ては冷え、かれては暖也といふがごとし。山水にていへば、山は本合し末わかれて中高く、水は本わかれ末合して中おちいる。昼夜にていへば、昼は地上の物をしめして天上の物をかくす。夜は天上の物を示して地上の物をかくす。是を天地の物にいへば、天にある物は燥てうかみ、夜明を發す。地に在る物はうるほつてしづみ、昼影をおさむ。天地の物皆かくのごとく反すれば、天地の物をつくさずんば、其反をかぞへ終るべからず。故に反せざれば天を知る事能あたはず、推さざれば人をする事能あたはず。己すに人

と生れては、才古今に秀でたりとも、眼天地を空すとも、人を出る事は能はざる也。然る時は学ぶも修するも人事なり。是を以て、入て内にありても、出て外にありても、貴ふして君公の位にありても、賤しふして奴婢卓隸にいたりても、只人の間なれば、只、孝悌忠信礼義廉恥の間也。もしこの人の外に道をたて、人事に害をなさば、是通天下の非なるべし。故に道は衆を安んずるより大ひなるはなく、功は衆を利するよりすぐれたるはなく候。これを以て、上一人より、下億兆にいたる迄、其品にたがひはあるとも、天生るの徳にならひ、天物を損はず、分る体る造化をたすけんと思さば、天地の大徳にそむかざるべき歟。

人生れて、各己に其一箇の天地を有し、各其混淪の体を立て、各その鬱淳の神を活すれば、権を以て下を御し候。是を控掣すといへども、もし其徳を失すれば、人情糜沸して、其権もちゆる所なし。其心の鬱淳、其身の混淪と、同異居を同じふすれば、千人の面おなじごとく千人の心同じ、千人の面同じからざることく千人の心同じからず。故に世に処するの道、意智の明、研窮すべしといへども、人情の変化熟せずんばあるべからず。民之失徳、乾餿以て過つと申も、この処にて御座候。さる故に世の中の或はみだれ或は治まり、或はたすけ或は殺し、悦びかなしみ、泣うたふも、皆るの鬱淳の所作にして、よく此鬱淳の所作をしらば、己を修め人をもよくし、長にかの天命にやすんずべく候。かしく。

安永丁酉臘月二日

存山 三浦 晋

解説

もし誰かが、ほんとうに哲学の精神でもってつらぬかれていますような書物を明治以前のものから取り出せといわれるなら、私は躊躇するところなく梅園のこの書を挙げようと思う。この書は手紙の形で書かれて居り、分量も多くはなく、文体において今日の読者には親しみがたい点があるでもあろう。しかし、それにもかかわらず日本の哲学思想史のなかで不朽の価値をもちつづけるものと思われる。なぜなら、人は真理を求めたいなら、学問的問とに心せよということ、梅園はこの書において思索的に縷々書き綴っているからである。一般に学問において、博学は貴ぶが、「問う」ことの意義の重要性を考えてみることはしなかつたわが国の思想家のなかで、梅園のような学者は稀れな存在だといわねばならない。彼が、問うということを中心にして、自分自身に投げかける問いこそ、哲学の精神でなくてはならない。

梅園が多賀墨郷宛に書き送った手紙は、三つほど残っている。安永六年十二月と同八年四月と同九年暮春との三つであるが、ここに収めたものはこれらのうち最初のものである。第二の手紙は梅園の條理の学の立場から考えられた医説であつて、臟腑に関するものである。第三も臟腑についての説であるが、第二のものよりは條理の思想にやや触れるところが多い。しかし、後の二つの手紙はともに最初のものに比べれば、叙述内容が医説の或る一つの知識に片寄つて居り、その上手紙の分量も僅かである。多賀墨郷はよほど熱心に質問したものと見え、梅園は「子〔多賀墨郷〕問ふて已やまず」と言っている。手紙が長くなり、一つの書物の形にならざるを得ぬことについては、「之に答へんと欲すれば則ち短簡の盡す所にあらず、答へざらんと欲すれば則ち殆ど友誼たじに負う」と述べている。

さて、第一の手紙の思想内容であるが、それが組織的に叙述されているものは、主著『玄語』のなかにあつて、それは『玄語』の最も重要な部分を形成してすらいる。殊に序論（『例旨』）のうちに集約されて示されている。「人が生きてゆくには、習わしによらないではいられない。習わしによると、人はそれに染まりこんでしまう。習わしに染まってしまえば、人はその素もとのものを失うことになり、蔽おほわれてしまうところができ、暗いところができてくる。それは蔽へいといつていいが、それが日常生活の上での蔽へいで済むなら、それに対しては学問があつて、これが蔽をのぞいてくれることができる。しかし、学問の蔽となると、もうほどこすべき術がない。習わしに染まることはたやすいが、それを素もとのものにもどすことはじつに難しい。素もとのものを蔽うことはやさしいが、素にかえすことはできない。因循薰蒸いんじゆんじゆんがつかさなると、それはちやうど屠人たちが羊の臭いのがわからぬようなものである。……そうなると、いたずらに学問に区画をつけて、互いに意見がちがつてき、はては敵視すらするようになる。それでは人々のせつかくの学習の聰明を蔽うことになり、人々の才力を病ましめることになる。」（「人之為生、必染於所習、染於所習、則失其所素、是以俗習之蔽、学為之砭鍼、学習之蔽、殆擲藥石、染之也易、素之也難、蔽之也易、復之也難、夫因循薰蒸之久、猶臭人之不臭其臭、屠人之不羶其羶、……区域相劃、是非互殊、於是乎、或相睨視、或相仇讐、学習之、所以蔽人之聰明、病人之才力也。」）こうした梅園の認識論的な反省は、人間と人間の学問が存続する限り、いつまでも哲学の中心の問題を形成することであろう。梅園は、因循薰蒸いんじゆんじゆんがつかさなり、「蔽へい」が「暗さ」を加え、それが人間の歴史の形成にあずかっていることを洞察している。一般に日本の思想家たちには明確な歴史概念が缺けていたが、梅園においてもそうで、彼は「歴史」の語を用いてはいない。しかし、「成」や「為」の概念を駆使する彼は私たちのこの歴史概念を有している。人が「為す」ことをすれば「痕」がのこるが、梅園のいう「痕」は歴史で

ある。これらの諸概念は独自の歴史理論をつくりあげている。それらの歴史理論のうちで、歴史の暗さと明るさの理論は特に秀いでている。

「法則的に明瞭なものを知らないならば、たとえ歴史の中の暗さを知るといっても、まだ精細にはわからない。法則的に明瞭なものの中でその明瞭さをしりぞけて歴史の暗さというものに通じ、歴史の暗さのなかでの暗さを忘却して法則的に明瞭なものに通じるように努める。明るさの中で、思想を暗さの中に通じてみ、その暗さをもってよく自分の所在の明るさを認識する。同時に、暗さの中で、思想の明るさの中に通じてみ、その明るさをもってよく自分の所在の暗さを知るように努める。これが『反観』といわれるものである。」（『玄語』の「小冊」のなかの「大物」の節を参照）。

ここに「反観」のことが言われているが、反観とは「反」のなかに真実のものを見てとる論理学的方法であって、この書（『多賀墨郷君にこたふる書』）が、平易に説き明かそうとしているところのものである。反観の学問的な解明は『玄語』の課題であるが、この書は「反観」という哲学的な精神は何よりも学問的な「問い」がもととなって発展するものであることを理解させようとしている。とにかく、この『書』はわが国における稀有な哲学的文献であるということができるといえる。

本書の底本は三浦家に所蔵されている梅園の自筆本である。この『書』が公けにされた最初は天明元年（一七八一年）に門人の加藤子睦が『梅園拾葉』を編集し公刊したときである。梅園が多賀墨郷に書き送ったこの『書』は、門人たちの間で写し伝えられたものと思われ、『洞仙先生口授』なる写本が豊前中津の帆足家に蔵せられているが、これなどこの『書』の類本の一つと見られる。尤も文章が違っていている所が多く、分量も少ない。『口授』は約五千八百語であるが、本書は約二万五千語から成っている。

校訂は句読点を入れた外は全くもとの儘である。なおこの『書』を現代語に書きかえたものは筆者の著述『三浦梅園の哲学』のなかに収めてある。

-
- 『三浦梅園集』（岩波文庫、一九六七年七月、第六刷、岩波書店）所収。
 - 旧字は新字改めた。
 - 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
 - PDF化にはL^AT_EX 2_εでタイプセッティングを行い、dvi_{ps}dfxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。